

鴨リといふは、カヘリ也、カヘリとは歸也といふなり、カルといふ鳥も、萬葉集の歌に見えて、抄には鴨の類也と註しぬ、これもまた歸るをや云ひぬらん、鴨をカモといひ、鴨をカモメといひし如きは、水にすむものも、多くはカといふ詞なり、呼びしなり、必其故あるべし、下略

〔倭訓栞〕

加前編六

かり 鴈は歌にもかりくと鳴とよめば鳴聲成べし、萬葉集にも、幾世をへてか

おのが名をよぶとよめり、伊勢物語にはよると鳴ともいへり、一説に歌にも假によせてよめり、秋來りて春かへり、假の住居する鳥なれば名くといへり、蝦夷島の深山の沼には、鶴鴈鴨ともに春夏の間群居す、又五十里おくなる常磐島より渡るとぞ、旅鴈などいへる意也、今俗音をよべり、源氏にかりのつらねて鳴聲かちの音にまがへと書り、所謂鴈櫓也、歌にいくつらなどよめるは、鴈行也、詩に鴈陣ともいへり、唐鴈とよぶは鶯也、野鴈とよぶは鶉也、海鴈は頸に環の如き白毛あり、ひしくひと呼ものは鴻也、常にまだらとよぶもの鴈也、俗に眞鴈と呼り、又腹白あり、琉球には鴻鴈來らずといへり、○中略

かりがね。鴈が音也、ざるを直に鴈の事になしていへり、後世一種の小鴈の名とするは俗説也、一説にねはめと通ず、むれ反め、鴈がむれ也、萬葉集に、かりがねの聲とよめる歌あり、新勅撰伊勢が歌も同じ、

〔松の落葉〕雁がね

雁がねはかりが音なる事、古今集の歌に、さよ中と夜はふけぬらしかりがねのきこゆるそらに月わたる見ゆ、といへるにてしるし、音のきこゆるとつゞきたる詞なり、又同集の歌に、霞ていにし雁がねはといへるは、たゞに雁をいへるやうなれど、末に今ぞ鳴なるとあれば、これも雁が音なることさだかなり、萬葉集の歌にも、雁鳴雁泣、雁音とぞかきたる、新古今集の定家卿の歌に、霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさにはるさめぞふる、とよみたまひしは、たゞ雁のこ